

山口蓬春記念館 年報

第三号 令和3～4年度



目 次

I. 展示及び関連イベント等の概要(令和3～4年度)	1
II. 収蔵品修復(日本画).....	12
III. 収蔵品保存対策	13
IV. 新収蔵品(令和3～4年度).....	14
V. 刊行物の発行(令和3～4年度).....	15

I. 展示及び関連イベント等の概要(令和3~4年度)

令和3年度も、引き続き山口蓬春没後50年・記念館開館30周年記念展を開催した。4月からの第2期展—発展—と、10月からの第3期—昇華—に分けて蓬春の画業を回顧することとし、年度内にこれら特別展を2回、さらに企画展を2回開催した。

令和3年は依然として収束の見通しが不透明なコロナ禍にあり、5月には従来型よりも非常に感染力が強いといわれたデルタ株が国内で初めて検出され流行が見られた。一方、東京でのオリンピック競技大会が7月23日から8月8日まで、パラリンピック競技大会が8月24日から9月5日まで開催されたものの、まだまだ外出を控える傾向が顕著に見られ、当館の来館者数に大きな影響があった。

令和4年に入ると、3月にまん延防止等重点措置が解除され、人流が活発化する傾向へと移行、来館者数も徐々に増加の傾向が見られた。しかし新型コロナに対する先行きの不透明感が残っていたため、令和2年度から実施していた開館時間の短縮(9:30開館、15:30閉館)を令和4年度も継続し、当館でも可能な限りの感染症対策を講じた上で、企画展を3回、特別展を2回開催した。

さらに、新たな生活様式の推進と文化芸術を途絶えさせないため、同年4月からは従来のFacebookアカウントに加え、Twitter、Instagramアカウントを開設・公開し、SNSによる山口蓬春や当館に関する情報発信の拡大に努めた。

令和3年度

山口蓬春没後50年・記念館開館30周年記念特別展 —第II期 発展—山口蓬春 美の履歴

令和3年4月10日(土)~9月26日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

前期: 4月10日(土)~5月9日(日)

中期: 5月16日(日)~7月25日(日)

後期: 8月7日(土)~9月26日(日)

後援: 神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数: 131日(前期: 26日 中期: 61日 後期: 44日)

山口蓬春(1893-1971)が77年にわたる生涯を閉じてから今年で50年を迎える。日本画の世界を一新した蓬春の功績は後進世代に引き継がれ、現代にも息づいている。蓬春作品や蓬春により蒐集された美術品を長年にわたって守り続けた春子夫人(1899-1991)の意向を受け、平成3年(1991)、葉山の旧邸跡に山口蓬春記念館が開館した。以来、蓬春作品と愛蔵の品々の展示、資料の調査・研究を通じて蓬春の人間像に迫ると同時に、夫妻が愛でた庭園や創造の場となった画室を含む家屋の整備、ならびに収蔵品の修復等により、蓬春の生きた時空間を感じていただける記念館を目指してきた。

令和3年10月に開館30周年を迎えた当館では、改めて蓬春の画業を検証し、とりわけその魅力を余すところなく紹介する特別展を開催した。

特別展の「第II期 発展」にあたる本展では会期を3つに分け、まず前期は蓬春コレクションより東洋美術の品々をご覧いただく「東洋への愛」、次に中期は普段見ることのできない秘蔵コレクションが葉山にやってくる「蓬春モダニズム—観たまま、感じたまま、知ったまま—」、後期は蓬春の画家としての原点を探る「日本画家・山口蓬春のルーツを探る」とそれぞれのテーマから蓬春の「美の履歴」を辿った。

遠く伊豆大島をのぞみ、背後に大峰山を背負うここ葉山一色の山口家旧邸にて、現代の日本画につながる道筋を示した数々の名作をご堪能いただいた。



チラシ 山口蓬春《北京風景 写生》《望郷》《扇面流し》(いずれも部分)

山口蓬春 美の履歴(前期) 「東洋への愛」

会期：令和3年4月10日(土)～5月9日(日)

休館日：毎週月曜日(5月3日を除く)、5月6日(木)

すぐれた古美術のコレクターとしても知られる蓬春。中でも東洋美術への深い探究心は、自身の画風の変遷を経ようともますます深まり、情熱の火は終生絶えることはなかった。その美の遍歴は大正末年頃から古美術専門店において磁州窯、備などの古陶磁を求めることに始まっている。新しい日本画の創造をめざし、昭和初期に始めた中国宋元画の学習を発端とし、朝鮮への旅、そして戦中には美術審査員として台湾、さらに中国各地への赴任を経て東洋の美への幅広い知識を持つようになる。彼の地で目にする数々の美術品によって、蓬春の審美眼はますます磨かれていった。

昭和31年には北京の雪舟等楊逝世四百五十周年記念式典に日本代表として参列、約2か月にわたり北京、大同雲崗石窟などを視察・写生し、その体験は蓬春芸術に精神的な奥行きを与えた。本展では蓬春が蒐集した東洋美術の精華をご覧いただき、その深く清冽な愛を探った。

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	備考
瓶花	山口蓬春(1893-1971)	大正12-13年(1923-24)	紙本着色	
首夏	山口蓬春	昭和4-5年(1929-30)	紙本着色	
市場 小下図	山口蓬春	昭和7年(1932)	紙本着色	第13回帝展出品作小下図
北京風景 写生	山口蓬春	昭和18年(1943)	紙本着色	山口蓬春写生展
天壇 写生	山口蓬春	昭和18年(1943)	紙本着色	
嘉靖方壺 写生	山口蓬春	昭和32年(1957)	紙本着色	
大同雲崗にて 写生	山口蓬春	昭和31年(1956)	紙本着色	山口蓬春写生展
十二月月風俗図	伝 土佐光吉(1539-1613)	桃山時代(16世紀)	紙本着色	重要文化財
三彩立女俑		中国・唐時代	陶器	

※出品作は全て当館所蔵

山口蓬春 美の履歴(中期) 「蓬春モダニズム—観たまま、感じたまま、知ったまま—」

会期：令和3年5月16日(土)～7月25日(日)

休館日：毎週月曜日(5月3日を除く)、5月6日(木)

東京美術学校西洋画科に進んだ蓬春。二科展に入選するなど順調な一歩を踏み出したものの、指導教官の一言から自らの日本画への可能性を見出し、悩んだ末に日本画への転身を果たした。その絵の魅力は洋画を学ぶ上で培われた確固たるデッサン力と日本画ならではの素材の活かし方、さらに天性のモダンな感覚が相まって発揮された。

「構想には自然に直面して、自然から受けたその場の感動が画因になって構想を生む場合と、頭の中で一通り纏めた考へによつて、自然の中から一つの構想を探し出す場合もある。」(『美術大講座 日本画科 第4巻 風景画実習』昭和13年)と述べているように、蓬春芸術にみる理知的な思想は、戦後の新しい時代を迎えることで、画面の随所に現れてゆく。

本展では昭和20年代の新たな一ページとなった「蓬春モダニズム」と形容される作品を中心に、蓬春の美への飽くなき追求の過程を探った。

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
錦秋	山口蓬春(1893-1971)	昭和11年(1936)	絹本着色	株式会社三井住友銀行
緑陰	山口蓬春	昭和25年(1950)	紙本着色	株式会社歌舞伎座
夏の印象 第6回日展	山口蓬春	昭和25年(1950)	紙本着色	個人
秋果	山口蓬春	昭和35年(1960)	紙本着色	株式会社三井住友銀行
望郷 第9回日展	山口蓬春	昭和28年(1953)	紙本着色	個人
青沼新秋 第10回日展	山口蓬春	昭和29年(1954)	紙本着色	個人

山口蓬春 美の履歴(後期) 「日本画家・山口蓬春のルーツを探る」

会期：令和3年8月7日(土)～9月26日(日)

前期：8月7日～8月29日 後期：8月31日～9月26日

休館日：毎週月曜日(8月9日、9月20日を除く)、8月10日(火)、9月21日(火)

大正7年、東京美術学校日本画科に転科した山口三郎(のちの蓬春)は、雅号を「蓬春」とし、日本画家としての道を歩み始めた。大正12年に同校を首席で卒業後、指導教授であった松岡映丘を盟主とする新興大和絵会を活躍の舞台とした。東京美術学校が新たな美術教育制度の変革を遂げる中、網羅的に収集された古美術の数々を臨模することでその技術は錬磨されていった。また京都に暮らし、季節の風物を間近に感じる体験も蓬春芸術の糧となった。

本展では当館が収蔵する、東京美術学校時代から新興大和絵会時代までの作品を一堂に会し、大正末から昭和初期にかけての蓬春の歩みを辿った。

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	備考
瓶花	山口蓬春(1893-1971)	大正12-13年(1923-24)	紙本着色	
初夏の頃(佐保村の夏)	山口蓬春	大正13年(1924年)	絹本着色	第4回新興大和絵会展
木場	山口蓬春	大正14年(1925)	絹本着色	新興大和絵会同人合作 「東都近郊十二景」のうち
山路	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色	第7回新興大和絵会展
武陵桃源	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色	第7回新興大和絵会展
緑庭	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色	第8回帝展
扇面流し	山口蓬春	昭和5年(1930)	紙本着色	第10回新興大和絵会展
飛天	山口蓬春	昭和5-6年(1930-31)	絹本着色	
伊勢物語図色紙	俵屋宗達(?-1640)	江戸時代(17世紀前半)	紙本着色	
飛鴨図	尾形光琳(1658-1716)	江戸時代(18世紀)	紙本墨画	

※出品作は全て当館所蔵

■関連イベント■

- 「国際博物館の日」来館者プレゼント

日時：5月18日(火)

内容：来館者全員に絵葉書を差し上げた。

- 展示解説

日時：①4月18日(日)、②6月20日(日)、③8月15日(日) 14:00-

参加人数：①2名、②4名、③1名

- 子どもと大人のための美術に親しむ教室

日時：6月5日(土) 13:00-16:00

会場：多目的室 講師：当館学芸員

参加人数：6名(応募者8名)

- 夏休み親子鑑賞期間割引

期間：8月11日(水)～22日(日)

※本展覧会はARTS for the future! 2(コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業)対象展です。

山口蓬春没後50年・記念館開館30周年記念特別展

第Ⅲ期 昇華—山口蓬春芸術の神髄—四季の連作と皇居宮殿の杉戸絵—

令和3年10月2日(土)～11月28日(日) ※会期中、一部展示替えを行った。

前期：10月2日(土)～31日(日)

後期：11月2日(火)～28日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：50日



チラシ 山口蓬春《秋》、写真「画室で新宮殿正殿松の間杉戸絵を制作する蓬春」

山口蓬春没後50年・記念館開館30周年記念特別展の最後を飾る「第Ⅲ期 昇華」では、山口蓬春(1893-1971)の画業の集大成であり、渾身の作ともいえる四季の連作と皇居宮殿正殿松の間杉戸《楓》に焦点をあてた展覧会を開催した。

蓬春は杉戸《楓》を制作するより先に、日本の四季をテーマに連作を描き始めた。《秋》(昭和36年〔1961〕)を皮切りに《春》(昭和37年〔1962〕)、《冬(枯山水)》(昭和38年〔1963〕)、《夏》(昭和40年〔1965〕)と描き終えた蓬春は、これまでの功績が認められ、同年文化勲章を受章した。その間の昭和39年(1964)に、蓬春は橋本明治(1904-1991)とともに宮内庁より皇居宮殿の杉戸絵制作の依頼を受けている。

そして、昭和43年(1968)、ついに蓬春は杉戸《楓》を、明治は《桜》を完成させた。これら宮殿に飾るために制作された作品は一般に公開されることはない。山種美術館創設者・山崎種二氏は、それらの作品を多くの人々が身近に鑑賞できるよう、宮殿に関わった作家たちに同様な作品を描くことを依頼し、蓬春もその試みに賛同するが、体調を崩し、完成には至らなかった。

本展では、蓬春の杉戸《楓》制作にまつわる作品とともに、四季の連作のうち、杉戸絵の「楓」と「桜」の季節である《秋》と《春》を、小下絵や下図と合わせてご紹介した。四季の連作や杉戸《楓》の制作過程を辿りながら、蓬春が愛した移ろいゆく自然の姿と杉戸絵の華麗な彩りに思いを馳せるとともに、生涯衰えることのなかった蓬春の新日本画創造にかけた情熱を探った。

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
桜 スケッチ	橋本明治(1904-1991)	昭和42年(1967)頃	水彩・鉛筆、紙	山種美術館
楓 皇居宮殿正殿松の間杉戸《楓》のためのスケッチ	山口蓬春(1893-1991)	昭和42年(1967)	水彩・色鉛筆・鉛筆、紙	山口蓬春記念館
スケッチブック(19)《楓》のためのスケッチ	山口蓬春	昭和40-43年(1965-68)	鉛筆・水彩・パステル、紙	神奈川県立近代美術館
梨花 スケッチ	山口蓬春	不詳	水彩・鉛筆、紙	山口蓬春記念館
梨(春小下絵)	山口蓬春	昭和37年(1962)	水彩・パステル・鉛筆、紙	神奈川県立近代美術館
春 下図	山口蓬春	昭和37年(1962)	クレヨン・鉛筆、紙	神奈川県立近代美術館
春	山口蓬春	昭和37年(1962)	紙本着色	東京国立近代美術館
スケッチブック(15)奥入瀬「椽」など	山口蓬春	昭和36年(1961)	鉛筆・色鉛筆、紙	神奈川県立近代美術館
とちの木(秋小下絵)	山口蓬春	昭和36年(1961)	色鉛筆・鉛筆、紙	神奈川県立近代美術館
秋 下図	山口蓬春	昭和36年(1961)	水彩・クレヨン・鉛筆、紙	神奈川県立近代美術館
秋	山口蓬春	昭和36年(1961)	紙本着色	東京国立近代美術館
新宮殿杉戸楓4分の1下図	山口蓬春	昭和42年(1967)	紙本彩色	山種美術館
新宮殿杉戸楓 杉板習作	山口蓬春	昭和43年(1968)	杉板彩色	山種美術館
楓図 下図	山口蓬春	昭和45年(1970)	岩絵具・水彩・色鉛筆・鉛筆、紙	山口蓬春記念館

■関連イベント■

● 第58回 葉山特別見学会
 日時：10月8日(金) 9:30-14:30
 場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館
 葉山・山口蓬春記念館
 ※新型コロナウイルス感染症拡散防止のため中止

● 山口蓬春生誕日
 日時：10月15日(金)
 内容：来館者全員に絵葉書を差し上げた。
 ● 展示解説
 日時：10月24日(日) 13:30-
 参加人数：5名

● 呈茶会
 日時：11月6日(土)、7日(日) 10:00-14:45
 会場：桔梗の間及び茶の間
 料金：1席600円(お菓子付き、要別途入館料)
 協力：葉山町茶道連盟
 ※新型コロナウイルス感染症拡散防止のため中止

※本展覧会はARTS for the future! 2(コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業)対象展です。

初冬企画展

山口蓬春と吉祥コレクション—モチーフ・文様に込められた願いとは—

開催期間：令和3年12月4日(土)～令和4年1月30日(日)

※会期中、一部展示替えを行った。

前期：12月4日(土)～12月28日(火)

後期：1月5日(水)～1月30日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：44日

山口蓬春は、毎年お正月になるとめでたきは光琳の絵からと愛蔵の尾形光琳筆《飛鴨図》を床の間に掛けて、新春のひとつきを過ごした。描かれている鴨などの水鳥は、中国ではおめでたい瑞鳥として良く知られ、日本では鴛鴦が水辺におしどりつがいで描かれるなどして夫婦仲の良さの象徴となっている。

このように私たちが何気なく見ている絵画のモチーフや工芸品の文様には、深い意味が込められていることがある。とくに中国では、古来より長寿や繁栄、富貴などの願いを込めて縁起が良いとされる動植物や、龍などの想像上の生き物、発音が縁起の良いものと同音のものなどを題材に取り入れてきた。その影響は文化・芸術を通じて日本にももたらされており、今日では、こうしためでたい画題を「吉祥」画題と呼んでいる。「吉祥」を尊ぶ姿勢からは、いつの時代にも変わらぬ人々の幸福への願いを垣間見ることができる。

本展では、蓬春が生涯を通じて蒐集した古美術品や、自身が掲げる新日本画の創造の糧となった古画の模写を展示し、それらを「吉祥」という観点から探ることで、モチーフや文様に込められた意味を探った。



チラシ 山口蓬春《立葵》尾形光琳《飛鴨図》
《古赤絵獅子唐草文平鉢》《白磁緑彩龍文鉢》
(いずれも部分)

●主な展示作品

作品名	作家名・生産地	制作年	材質・技法
武陵桃源	山口蓬春(1893-1971)	昭和2年(1927)	絹本着色
立葵	山口蓬春	昭和8年(1933)頃	紙本着色
白蓮木蓮	山口蓬春	昭和32年(1957)	紙本着色
花菖蒲	山口蓬春	昭和37年(1962)	紙本着色
竹虫図 模写	山口蓬春	不詳	紙本着色
飛鴨図	尾形光琳(1658-1716)	江戸時代(18世紀初頭)	紙本墨画
古赤絵獅子唐草文平鉢	中国・景德鎮窯	明時代(16-17世紀)	磁器
白磁緑彩龍文鉢	中国・景德鎮窯	明時代 正徳年間(1506-1521)	磁器
老松茶器 秋草蒔絵 銘「松風」	鍋木清方(1878-1972)画	昭和40年(1965)頃	木、漆
阿竹大日如来 小下絵	鍋木清方	昭和18年(1943)	紙、鉛筆・墨・岩彩

※出品作は全て当館所蔵

■関連イベント■

● 展示解説

日時：12月12日(日) 13:30-
参加人数：7名

● 鎌倉市鍋木清方記念美術館との連携イベント

「葉山 鎌倉 近代日本画家の旧居跡めぐり」

期間：1月5日(水)～2月27日(日)

内容：① 鍋木清方に関するミニ展示

② オリジナルグッズプレゼント(先着順)

新春企画展

山口蓬春の古陶磁が奏でる美の世界

開催期間：令和4年2月5日(土)～4月3日(日)

※会期中、一部展示替えを行った。

前期：2月5日(土)～3月6日(日)

後期：3月8日(火)～4月3日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：50日



令和4年 2月5日(土) ▶ 4月3日(日)
前期：2月5日(土)～3月6日(日) 後期：3月8日(火)～4月3日(日)
※本展覧会に併せて、山口蓬春の古陶磁に関する展示も行われます。詳しくは本展覧会のパンフレットをご覧ください。
【休館日】 前期：2月5日(土)～3月6日(日) 後期：3月8日(火)～4月3日(日)
【入館料】 観覧料：大人1,000円(中学生以下は無料) 特別展覧会：大人1,000円(中学生以下は無料) 特別展覧会：大人1,000円(中学生以下は無料)
【お問い合わせ】 山口蓬春記念館 企画課 046-255-2222
【主催】 神奈川県教育委員会、山口蓬春記念館、葉山町教育委員会、葉山町文化振興会
【協賛】 山口蓬春記念館、葉山町文化振興会、葉山町教育委員会、葉山町観光協会

チラシ 山口蓬春《瓶花》

昭和28年(1953)、神奈川県葉山町の山口蓬春の邸宅内に、近代数寄屋造りの名匠・吉田五十八設計による新画室が建てられた。その画室には制作の場としての空間だけでなく飾り棚が設けられ、そこには蓬春が蒐集した古今東西の古陶磁などが飾られた。「絵の材料にしようという狙いから入手しますが、しかし結局は好きだから集めるのですね」(「鴛鴦鼎談」『陶説』53号、昭和32年[1957]、日本陶磁協会)と陶磁器専門雑誌の取材に蓬春は答えている。これらの蒐集は東京美術学校を卒業した大正時代末頃より始まったといい、はじめ「中国のものが一番先に好きになりまして。」(前掲書)と中国・唐時代の立女俑を入手した。その後、蓬春は朝鮮やペルシア、日本など実に様々なものに関心を向け、そのコレクションは充実したものになっていく。そして、それらのコレクションは作品のなかにモチーフとして登場するようになり、とくに昭和30年代には、花や果物などと組み合わせた静物画として多数描かれるようになる。蓬春は、同じテーマで繰り返し描くことで、色彩の交響的な効果を図り質感と量感を把握して物を立体的に描き出した。そこに新しい日本画の創造を模索する蓬春のそのものの美を追求する姿勢を垣間見ることができる。

本展では蓬春が愛蔵した数々の古陶磁を展示し、画家としての魅力だけでなく蒐集家としての側面を紹介した。また日本画や下図などから蓬春がいかにして古陶磁を作品に取り込んでいったのかを探った。

●主な展示作品

作品名	作家名・生産地・出土地	制作年	材質・技法
瓶花	山口蓬春(1893-1971)	大正12-13年(1923-24)	紙本着色
嘉靖方壺 写生	山口蓬春	昭和32年(1957)	鉛筆・色鉛筆、紙
静物	山口蓬春	昭和36年(1961)	紙本着色
ペルシアの鉢	山口蓬春	昭和39年(1964)	紙本着色
瓶花	山口蓬春	昭和40年(1965)	紙本着色
三彩小鉢	イラン・ニシャプール出土	9-10世紀頃	陶器
白地彩画飛鳥文鉢	イラン・トランスオクシアナ出土	9-10世紀頃	陶器
黒釉鉄絵玉壺春瓶	中国・磁州窯	宋～金時代(12-13世紀)	磁器
白地鉄絵篋耳瓶	中国・磁州窯	元時代(13-14世紀)	陶器
白磁黒彩重線文瓶	中国・磁州窯	元～明時代(13-15世紀)	陶器

※出品作は全て当館所蔵

■関連イベント■

- 鎌倉市鎌木清方記念美術館との連携イベント「葉山 鎌倉 近代日本画家の旧居跡めぐり」
期間：1月5日(水)～2月27日(日)
内容：① 鎌木清方に関するミニ展示
② オリジナルグッズプレゼント(先着順)

- 展示解説
日時：①2月6日(日)、②3月19日(土) 13:30-
参加人数：①1名、②2名
- 第59回 葉山特別見学会
日時：3月3日(木) 9:30-14:30
場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館
※新型コロナウイルス感染症拡散防止のため中止

- 呈茶会
日時：3月5日(土)、6日(日) 10:00-14:45
会場：桔梗の間
料金：1席600円(お菓子付き、要別途入館料)
協力：葉山町茶道連盟
※新型コロナウイルス感染症拡散防止のため中止

※本展覧会はARTS for the future! 2(コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業)対象展です。

令和4年度

春季企画展

山口蓬春と四季の移ろい—蓬春が描いた自然の息吹—

開催期間：令和4年4月9日(土)～6月5日(日)

※会期中、一部展示替えを行った。

前期：4月9日(土)～5月8日(日)

後期：5月10日(火)～6月5日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：50日



チラシ 山口蓬春《白蓮木蓮》新橋演舞場緞帳原画(部分)《春野》(部分)《紅梅》(部分)《夏影》(部分)、伝土佐光吉《十二月風俗図》より11月「御火焚」(部分)

古来、日本絵画の主要な型の一つとして、春夏秋冬にわたる歳時を描いた四季絵がよく知られている。四季絵は最初、平安後期の儀礼書の中で、屏風や障子などに描かれたことが記されており、当初は和歌からの発想による景物が絵画化されていた。室町時代には四季あるいは春・秋の二季を屏風の左右隻に分けて描く形式が、さらに、江戸時代には夏から秋へ、晩秋から早春へと季節の推移を表現した作品も生み出されており、四季を描く伝統はその表現の型を新しくしながら、現代の日本画にも息づいている。

山口蓬春(1893-1971)は東京美術学校日本画科に在籍中、日本絵画の伝統を学んだ後、新しい時代にふさわしい、独自の日本画を追究してきた。美校で学んだやまと絵の形式に関して、「今日の感情なり思想なりに一致させる事は困難だと思う。」(『アトリエ』昭和7年3月)と述べているように、その画法から自らを遠ざける。その一方で、蓬春は四季に生じる万物の代表として描かれた中国宋元時代の花鳥画に魅せられ、花卉草木の写生によって得られる自然観照の境地に重きを置くようになる。

本展では、蓬春作品における花卉花鳥の描写に着目し、その時代時代の感覚を映しながら変遷をたどった蓬春の感性に映る四季の移ろいの表現を展覧した。また、蓬春が参考品として入手した月次絵(※)の代表作《十二月風俗図》(重要文化財)などを展示し、東洋絵画にみる四季の機微を味わい、古典芸術への思慕を追体験した。

※月次絵……12か月の行事や風俗、自然の季節の移り変わりなどの画題を月の順に並べ描いた連作。

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法
山路	山口蓬春(1893-1971)	昭和2年(1927)	絹本着色
飛潭	山口蓬春	昭和3-4年(1928-29)頃	絹本着色
春野	山口蓬春	昭和6年(1931)	絹本着色
四季山水図(湊川神社奉納屏風)小下絵	山口蓬春	昭和9年(1934)	紙本着色
紅梅	山口蓬春	昭和12年(1937)頃	紙本墨画着色
泰山木	山口蓬春	昭和14年(1939)	絹本着色
白蓮木蓮 新橋演舞場緞帳原画	山口蓬春	昭和32年(1957)	紙本着色
夏影	山口蓬春	昭和38年(1963)	紙本着色
十二月月風俗図	伝 土佐光吉(1539-1613)	桃山時代(16世紀後半)	紙本着色
下行水 画賛	狩野常信(1636-1713)	江戸時代(17世紀後半)	紙本墨画淡彩
春山訪里	浦上玉堂(1745-1820)	江戸時代(18-19世紀)	絹本淡彩
芙蓉に小禽		中国・清時代(18世紀)	紙本着色

※出品作は全て当館所蔵

■関連イベント

● 展示解説

日時：①4月17日(日)、②5月22日(日) 13:30-

参加人数：①3名、②4名

● 「国際博物館の日」来館者プレゼント

日時：5月18日(水)

内容：来館者全員に絵葉書を差し上げた。

● 子どもと大人のための美術に親しむ教室

日時：6月4日(土) 13:00-16:00

会場：多目的室

講師：当館学芸員

参加人数：18名(応募者56名)

※本展覧会はARTS for the future! 2(コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業)対象展です。

夏季企画展

山口蓬春 新日本画への飛躍—モダニズムへの歩みを探る—

開催期間：令和4年6月11日(土)～9月25日(日)

※会期中、一部展示替えを行った。

前期：6月11日(土)～7月24日(日)

後期：8月6日(土)～9月25日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：82日



チラシ 山口蓬春《南嶋薄暮》

山口蓬春が風光明媚な神奈川県葉山に転居したのは、昭和22年(1947)のことである。この地で蓬春は、東洋画の知識を基に西欧近代絵画をも彷彿とさせる明るく知的な画面構成を追求し、それは「蓬春モダニズム」と呼ばれ、戦後の日本画壇に進むべき道筋を示した。これは、戦前から蓬春が取り組んできた新日本画創造の大きな成果と捉えることができるのではないだろうか。

蓬春は大正12年(1923)に東京美術学校を卒業後、新興大和絵会の一員として、やまと絵の伝統的な技法を学ぶ。その後、さらなる飛躍を求めて美術団体・六潮会を結成した。日本画、洋画、美術評論という流派を超えた自由な雰囲気の中で学ぶこの会は、蓬春にとってかけがえのない研鑽の場となった。蓬春は琳派や写実的な花鳥画など、これまでの画風とは異なる独自の絵画表現を模索してゆく。昭和15年(1940)には、たびたび展覧会審査員として訪れていた台湾に取材した《南嶋薄暮》を制作する。外地で目にした風物に素直に感動し制作された作風からは、モダニズムに通じる創作に邁進する蓬春の画家としての真摯な姿勢が見受けられる。

終戦を疎開地の山形県赤湯で迎えた蓬春は「一時は人並みに虚脱の状態に陥り、甚だ無為に日を過ぎて居ました。」*とその時の心境を吐露しているが、葉山の地への転居後は、その思いを払拭するかのように明るくモダンな作品を生み出してゆく。それは戦時下で思うような制作ができない環境の中であたためていた新日本画創造の構想が、一気に花開いたと見ることもできる。

本展では、画業初期の新興大和絵会の時代から、蓬春がいかに近代日本画の進むべき方向を模索しモダニズムへと飛躍していったのかを、当時の画家たちの交流にも触れながらその歩みを振り返った。*山口蓬春『新日本画の技法』美術出版社、昭和26年(1951)

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法
扇面流し	山口蓬春(1893-1971)	昭和5年(1930)	紙本着色
溪	山口蓬春	昭和10年(1935)	紙本着色
サンティモンにて 写生	山口蓬春	昭和13年(1938)	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩
南嶋薄暮	山口蓬春	昭和15年(1940)	紙本着色
山湖(裏磐梯) 写生	山口蓬春	昭和22年(1947)頃	紙、鉛筆・水彩
果子図	山口蓬春	昭和24年(1949)	紙本着色
都波喜	山口蓬春	昭和26年(1951)頃	紙本着色
暁風白露	外狩素心庵(1893-1944) 画 牧野虎雄(1890-1946) 讃	昭和10年(1935)	紙本墨画淡彩
雨	木村荘八(1893-1958)	昭和13年(1938)	紙本着色

※出品作は全て当館所蔵

■関連イベント■

● 展示解説

日時：①6月18日(土)、②8月13日(土) 13:30-
参加人数：①4名、②1名

● 夏休み親子鑑賞期間割引
期間：8月6日(土)～31日(水)

● 邸園ツアー

日時：9月19日(月・祝)、①11:00- ②13:30-
会場：本館及び庭園
参加人数：①3名、②0名

日時：9月23日(金・祝)、①11:00- ②13:30-
会場：本館及び庭園
参加人数：①4名、②0名

※本展覧会はARTS for the future! 2(コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業)対象展です。

秋季特別展

山口蓬春と皇室—現代へ続く蓬春レガシーの系譜—

開催期間：令和4年10月1日(土)～11月27日(日)

※会期中、一部展示替えを行った。

前期：10月1日(土)～30日(日)

後期：11月1日(火)～11月27日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：50日

昭和という新たな時代の幕開けを待つかのように、若くして時代の寵児となり、時を経て日本画壇を牽引する立場となった山口蓬春(1893-1971)は、皇室との関わりも多かったといえる。

昭和3年(1928)には、皇太子のご成婚奉祝の献上品である《現代風俗絵巻》や昭和天皇の即位を奉祝して制作された画稿《昭和御大典繪巻》を師・松岡映丘(1881-1938)らとともに制作している。

戦後、葉山へ転居した蓬春は、元侍従長・入江相政(1905-1985)と懇意にしていたこともあり、葉山の御用邸に赴いて、香淳皇后(1903-2000)と絵の話をすることもあったという。また、香淳皇后が御絵を制作される時に使用された揮毫机や椅子などは、蓬春自身の考案によって製作され、使用していたものが入江元侍従長の目に留まり、同様のものが作られたというエピソードもある。そして、宮内庁から皇居宮殿造営にあたり、正殿松の間杉戸制作の依頼を受けた蓬春は、昭和43年(1968)、おおよそ4年の歳月を費やして《楓》を完成させた。

そのような蓬春の周囲には、いつしかその人柄や才能を慕い若い画家たちが集まっていた。例えば、平成の大嘗会の屏風を制作した東山魁夷(1908-1999)と高山辰雄(1912-2007)は、蓬春とともに旅行をするなどプライベートでも懇親を深めていた。また、令和の大嘗会の屏風を制作した土屋禮一(1946-)は、蓬春の孫弟子にあたる。蓬春にとって若い画家と接することは、その才能を育てるとともに、芸術家としてお互いに切磋琢磨することで自身の目標である新日本画創造への意欲を高めていったといえるだろう。そして、その姿は若い画家たちの大きな糧となり、蓬春の情熱とともに現代へと脈々と受け継がれている。

本展では、蓬春と皇室との関わりに焦点をあてるとともに、皇室との関わりを通じて育まれた次世代の画家たちの活躍も「蓬春レガシー」の一つとして捉え、現代に受け継がれた系譜とその意義を探った。



チラシ 山口蓬春《聖徳記念絵画館壁面下図 岩倉大使欧米派遣》

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
皇居宮殿長和殿波の間壁画《朝明けの潮》のための中下絵1/6	東山魁夷(1908-1999)	昭和43年(1968)	紙本着色	東京国立近代美術館
緑庭	山口蓬春(1893-1971)	昭和2年(1927)	絹本着色	山口蓬春記念館
昭和御大典繪巻(『昭和聖帝御即位大典画史』〔国際情報社〕附録画稿)	山口蓬春	昭和3年(1928)	絹本着色	神奈川県立近代美術館(山口蓬春文庫)
聖徳記念絵画館壁画《岩倉大使欧米派遣》小下絵	山口蓬春	昭和9年(1934)	紙本彩色	明治神宮
花菖蒲 素描	山口蓬春	昭和20年(1945)代	鉛筆・水彩、紙	宮内庁三の丸尚蔵館
菊 素描	山口蓬春	昭和20-30年(1945-1955)代初	鉛筆・色鉛筆・水彩、紙	宮内庁三の丸尚蔵館
秋意	山口蓬春	昭和37年(1962)	紙本着色	宮内庁三の丸尚蔵館
里の道(山口蓬春記念館開館記念)	高山辰雄(1912-2007)	平成6年(1994)	絹本着色	個人

■関連イベント■

●展示解説

日時：①10月8日(土)、②11月3日(木・祝) 13:30-
参加人数：①2名、②5名

●山口蓬春生誕日

日時：10月15日(土)

内容：山口蓬春の生誕を記念して来館者全員にオリジナルグッズを差し上げた。

●早茶会

日時：①11月5日(土)、②6日(日) 10:00-14:00

会場：桔梗の間

料金：1席600円(お菓子付き、要別途入館料)

協力：葉山町茶道連盟

参加人数：①20名、②17名

●第60回 葉山特別見学会

日時：11月17日(木) 9:30-14:30

場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館

参加人数：15名(応募17名)

初冬企画展

山口蓬春の画室から見る日本画家のまなざし

開催期間：令和4年12月3日(土)～令和5年1月29日(日)

※会期中、一部展示替えを行った。

前期：12月3日(土)～12月28日(水)

後期：1月5日(木)～1月29日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：44日



チラシ 山口蓬春《新冬》《椿》(写生)(部分)

山口蓬春(1893-1971)は昭和20年(1945)、戦火が広がる東京・祖師谷の地を後にして山形県赤湯に疎開のち、昭和23年(1948)、現在記念館のある葉山一色の小高い丘に終の棲家を構えた。海をのぞみ、山を背負う家屋での暮らしの中で、蓬春は庭を囲む草木の四季の移ろいに接し、居ながらにして野鳥の囀りが聞こえる環境のなかで一日の大半を過ごし、創造活動に専念した。

還暦を迎えた昭和28年(1953)、親友で近代数寄屋造りの名匠である吉田五十八(1894-1974)設計による、蓬春念願の新画室が完成する。南北が庭に面した画室で制作する蓬春の視線の先には、一年を通して椿や梅、紅葉といった和物の草木を始め、当時まだ珍しかったミモザアカシアやクリスマスローズのような洋花まで、蓬春夫妻が慈しみ愛でた多種多様な植物が溢れ、二人の目を楽しませていた。時折、蓬春が窓を広く開け放ち、目の前に広がる穏やかな情景をスケッチする姿も見られた。

そして画室の西には読書家で知られる蓬春のために書庫も新設され、画室から直接通じる扉が設けられた。扉の奥には美術書を中心とした書籍が取められ、稀覯本・大型美術図書の多くは蓬春の蔵書印が捺され、手製の函に入れて丁寧に保管されるなど蓬春の愛着ぶりを見て取ることができる。中国宋元画の図録、江戸時代の本草学の和装本、愛らしい小禽の登場する花鳥画譜に心を遊ばせる一方で、蓬春は各時代の自然観に親しみ、古典や伝統を学ぶことで知識と教養、そして研究を深めていった。

蓬春は自著^(註)の中で、「新日本画の創造を目指す為には、新しい素材を自己の眼で自然の中から自由に探究することが基盤である」と記している。また、「新しい感性の働きを発揮するためには、日本画の古典的なものを十分に研究し、新藝術の糧にしなければならない」とも述べている。蓬春の感性は古典と現代との間を自由に行き来し、画室から眺める庭の植物や小鳥たちの生きた姿に、時代の流れを超えても変わらない普遍的な美を見出していたのではないだろうか。

本展では画室を取り囲む庭の情景を写した蓬春の作品と素描から、画家のまなざしに映った街のない自然の姿を探った。さらに山口蓬春文庫(神奈川県立近代美術館)より借用した蓬春蒐集の『花叢』(江戸時代、18世紀)、『景年花鳥畫譜』(明治時代、19世紀)、『宋元名畫集 續』(昭和13年)を当館で初めて展示し、蓬春が理想として追求した自然への美のスタイルを迫体験していただいた。

註 山口蓬春『新日本画の技法』昭和26年(1951)、美術出版社

●主な展示作品

作品名	作家名・発行者名	制作年・刊行年	材質・技法	所蔵
新冬	山口蓬春(1893-1971)	昭和37年(1962)	紙本着色	山口蓬春記念館
洩るゝ陽	山口蓬春	昭和36年(1961)	紙本着色	山口蓬春記念館
桔梗	山口蓬春	昭和38年(1963)	紙本着色	山口蓬春記念館
雉 写生	山口蓬春	昭和35年(1960)頃	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩	山口蓬春記念館
椿 写生	山口蓬春	昭和28年(1953)頃	紙、鉛筆・色鉛筆・水彩	山口蓬春記念館
『景年花鳥畫譜』	今尾景年(1845-1924)画 西村總左衛門(1855-1935)発行	明治24-25年(1891-92)	和装本	神奈川県立近代美術館(山口蓬春文庫)
『花叢』	島田充房、小野蘭山(1729-1810)著 大路儀右衛門発行	明和2年(1765)	和装本	神奈川県立近代美術館(山口蓬春文庫)
『宋元名畫集 續』聚楽社刊	秋葉啓発行	昭和13年(1938)	和装本	神奈川県立近代美術館(山口蓬春文庫)
鶉鳩図 松浦詮氏旧蔵	狩野國松	室町時代(16世紀前半)	紙本着色	山口蓬春記念館
岩に兎 原本：雪舟	山口蓬春模	大正7-12年(1918-1923)頃	紙本着色	山口蓬春記念館
海棠画賛	伝 銭選(1235頃-1301以後)	中国・元時代(13世紀)	絹本着色	山口蓬春記念館
草蟲図 原本：呂敬甫	山口蓬春模	大正7-12年(1918-1923)頃	紙本着色	山口蓬春記念館
画室からの眺め 写生	山口蓬春	昭和30年(1955)頃	紙、鉛筆	山口蓬春記念館
昭和28年(1953)に完成した画室のヴェランダでスケッチする蓬春(60歳頃)		昭和29年(1954)頃	写真	山口蓬春記念館

■関連イベント

● 展示解説

日時：①12月18日(日)、②1月8日(日) 13:30-
参加人数：①4名、②9名

● 鎌倉市鏑木清方記念美術館との連携イベント

「葉山 鎌倉 近代日本画家の旧居跡めぐり」
期間：1月5日(木)～2月26日(日)
内容：① 鏑木清方に関するミニ展示
② オリジナルグッズプレゼント
(先着順)

新春特別展

山口蓬春・新興大和絵会の時代

開催期間：令和5年2月4日(土)～4月2日(日)

※会期中、一部展示替えを行った。

前期：2月4日(土)～3月5日(日)

後期：3月7日(火)～4月2日(日)

後援：神奈川県教育委員会・葉山町教育委員会

開館日数：50日

山口蓬春(1893-1971)は、10代半ばから白馬会絵画研究所にて油絵を学び、大正4年(1915)に東京美術学校西洋画科に入学している。しかし指導教官の助言などにより大正7年(1918)に西洋画科を退学し、同校日本画科を受験し再入学する。洋画から日本画に転向した蓬春は、当時やまと絵の第一人者であった松岡映丘(1881-1938)の指導のもと、伝統的な日本画技法を学び、その才能を開花させた。大正10年(1921)には、やまと絵の近代化に努めていた映丘を顧問として門下生たちが新興大和絵会を結成し、蓬春も大正12年(1923)に日本画科を首席で卒業すると同会に加わり研鑽を積むこととなる。そして蓬春が大正15年(1926)の第7回帝展に出品した《三熊野的那智の御山》は、特選と帝国美術院賞、皇室買上げという三重の榮譽に浴し、翌年の《緑庭》でも特選を受賞するなど、一躍、蓬春は画壇において脚光を浴びる存在となった。

この時期、新興大和絵会の特徴とされた岩絵具の群青や緑青などによる色鮮やかな濃彩で描かれた作品が流行するなど、近代日本画史上においてこの新興大和絵の活動は重要な出来事の一つとなっている。新興大和絵会は昭和6年(1931)に解散するが、蓬春は新たな美術団体・六潮会の結成に参加するなど、新興大和絵会時代では見られなかった新しい日本画表現を模索してゆく。しかし蓬春の多岐にわたる画業において大正時代から昭和初期に参加した新興大和絵会の時代こそが、蓬春を画壇の第一線に押し上げ、かつ、やまと絵を突き詰めた先に彼がその後創造していく多様な画風の礎を形成したといえるのではないだろうか。その意味で新興大和絵会は、モダニスト・山口蓬春を生み出すうえで重要な役割を果たしたと言える。

本展では、新興大和絵会時代の蓬春の作品に着目し、やまと絵の近代化を模索した若き日の蓬春の画業を振り返った。さらに当館では初めて千葉県成田市の小御門神社に伝わる松岡映丘一門による絵巻を展示した。



チラシ 山口蓬春《御堂供養》《木瓜》《扇面流し》(部分)

●主な展示作品

作品名	作家名	制作年	材質・技法	所蔵
御堂供養	山口蓬春(1893-1971)	大正9年(1920)頃	絹本着色	神奈川県立近代美術館(山口蓬春文庫)
比良暮雪	山口蓬春	大正13年(1924)頃	絹本着色	神奈川県立近代美術館(山口蓬春文庫)
初夏の頃(佐保村の夏)	山口蓬春	大正13年(1924)	絹本着色	山口蓬春記念館
木場	山口蓬春	大正14年(1925)	紙本着色	山口蓬春記念館
夏日[山路]	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色	山口蓬春記念館
緑庭	山口蓬春	昭和2年(1927)	絹本着色	山口蓬春記念館
木瓜	山口蓬春	昭和14年(1929)	紙本着色	大倉集古館
扇面流し	山口蓬春	昭和15年(1930)	紙本着色	山口蓬春記念館
志賀の浦なみ(「小御門神社御絵傳」上巻より)	松岡映丘(1881-1938)	昭和14年(1939)	絹本着色	小御門神社
那古谷之配所(「小御門神社御絵傳」下巻より)	山口蓬春	昭和14年(1939)	絹本着色	小御門神社

■関連イベント

●展示解説

日時：①2月12日(日)、
②3月19日(日) 13:30-
参加人数：①4名、②1名

●鎌倉市籾木清方記念美術館との連携イベント
「葉山 鎌倉 近代日本画家の旧居跡めぐり」
期間：1月5日(木)～2月26日(日)
内容：① 籾木清方に関するミニ展示
② オリジナルグッズプレゼント(先着順)

●第61回 葉山特別見学会
日時：2月16日(木) 9:30-14:30
場所：葉山しおさい博物館・神奈川県立近代美術館 葉山・山口蓬春記念館
参加人数：6名(応募6名)

●呈茶会
日時：①3月4日(土)、②5日(日)
10:00-14:45
会場：桔梗の間
料金：1席600円(お菓子付き、要別途入館料)
協力：葉山町茶道連盟
参加人数：①15名、②14名

II. 収蔵品修復(日本画)

笠 理砂

令和3年度

当館所蔵作品・山口蓬春作《春野》《喫茶去》は剥落ならびに鑑賞を損ねる経年のシミがみられ、また蓬春の収集作品《芙蓉に小禽》、富岡鉄斎《富嶽図》は損傷が進行し、展示にふさわしくない状態になっていることから、これらの作品の修理作業を実施した。

1. 作業期間 令和3年6月から令和4年2月まで
2. 委託業者 有限会社 目黒黄鶴堂
3. 委託作品 (1) 山口蓬春《春野》 昭和6年(1931) 絹本着色／軸装
本紙：125.4×39.9 cm 軸寸：222.5×56.0cm
(2) 山口蓬春《喫茶去》 昭和12-13年(1937-38)頃 紙本淡彩、墨書／額装
本紙：21.0×53.0 cm 額寸：38.5×67.0cm
(3) 《芙蓉に小禽》 山口蓬春コレクション 紙本着色／軸装
本紙：26.5×43.5cm 軸寸：120.0×56.5cm
(4) 富岡鉄斎《富嶽図》 山口蓬春コレクション 大正4年(1915)頃 紙本着色／扇子
本紙：28.5×46.0 cm
4. 修理概要 (1) デリケートな絹本での胡粉剥落が認められたため、剥落止め処置を行った。
(2) 鑑賞を妨げる濃いシミが多数確認されたため、シミ抜きを行い、消毒・乾燥した。
(3) 蓬春が花鳥画の研究材料として入手した作品だが、本紙全体に横折れ、縦折れが多数生じている上、虫損、カビによる変色も確認されたため、汚れを除去し、和紙を補強した。更に、今後の折れを防ぐため、太巻き棒を作成した。
(4) 既に緑青の絵の具が剥落して、扇のひだの間に溜まっている状態であった。扇子に仕立てられた状態で剥落止めを施して、開いたままの状態での展示可能な額装に仕立てた。額装には無反射アクリル版を嵌めた。

令和4年度

当館所蔵作品・山口蓬春《溪》は本紙全体に強い横折れがあり、その欠損が着色部分に掛かっている点や一部胡粉の剥離が懸念されることから令和4年度の修復作品として作業を進めることとした。

1. 作業期間 令和4年10月から令和5年2月
2. 委託業者 有限会社 目黒黄鶴堂
3. 委託作品 山口蓬春《溪》 昭和10年(1935)頃 紙本着色／軸装
本紙：132.0cm×31.5cm 額寸：217.0×45.3 cm
4. 修理概要 本紙全体に強い横折れならびに糊離れによる浮きが見られた。また下部に小さなシミが見られたことから表装を解体し総裏打ち紙を取り換え、締め直しを行った。また今後の保存を考慮し、桐材太巻芯と印籠箱、袱紗を新調した。

Ⅲ. 収藏品保存対策

平成27年度(2015)より継続している環境調査及び除塵防黴施工を実施した。

年度	令和3年度		令和4年度	
環境調査環境調査				
調査年月日	令和3年6月29日～8月1日		令和4年7月7日～8月3日	
施工場所	新収蔵庫、収蔵庫、書庫、展示室1～3		新収蔵庫、収蔵庫、書庫、展示室	
施工業者	株式会社フミテック		株式会社フミテック	
調査方法	昆虫生息調査		昆虫生息調査	
	表面付着菌調査		表面付着菌調査	
	空中浮遊菌調査		空中浮遊菌調査	
	酸・アルカリ検査		酸・アルカリ検査	
使用機器名	付着菌調査	栄研化学(株)PT2625 CP加ポテトデキストロース寒天培養地	付着菌調査	栄研化学(株)PT2625 CP加ポテトデキストロース寒天培養地
	空中浮遊菌調査	MERCK社 MAS100ECO エアースンプラー 栄研化学(株)PT2625 CP加ポテトデキストロース寒天培養地	空中浮遊菌調査	MERCK社 MAS100ECO エアースンプラー 栄研化学(株)PT2625 CP加ポテトデキストロース寒天培養地
	浮遊粉塵量調査	柴田科学株式会社 デジタル粉塵計 P-5H2型	浮遊粉塵量調査	柴田科学株式会社 デジタル粉塵計 P-5H2型
	温・湿度調査	(有)東京吉野計器 アスマン式乾湿球温度計 SS-3BM	温・湿度調査	(有)東京吉野計器 アスマン式乾湿球温度計 SS-3BM
除塵防黴施工				
施工年月日	1回目：令和3年8月2日 2回目：11月2日 3回目：令和4年1月11日 4回目：3月3日、4日		1回目：令和4年8月3日、4日、5日 2回目：令和5年2月1日	
施工場所	1回目：展示室1～3 2回目：新収蔵庫 3回目：収蔵庫 4回目：書庫		1回目：新収蔵庫、収蔵庫、書庫 2回目：展示室1～3	
施工業者	株式会社フミテック		株式会社フミテック	
施工目的	除塵防黴		除塵防黴	
使用資材	テックリンウェット(防黴用ウェットタオル) テックリンドライ(除塵用ドライクロス)		テックリンウェット(防黴用ウェットタオル) テックリンドライ(除塵用ドライクロス)	

IV. 新収蔵品(令和3~4年度)

令和2年度寄贈 290点(書簡・資料・素描)
43点(書籍)

※令和2年度寄贈については、令和3年度寄贈と合わせて整理した関係により、本年報に掲載することとした。

令和3年度寄贈 176点(本画・素描・近代絵画・書跡・複製画・拓本・名刺・新聞・写真・紙類・その他)

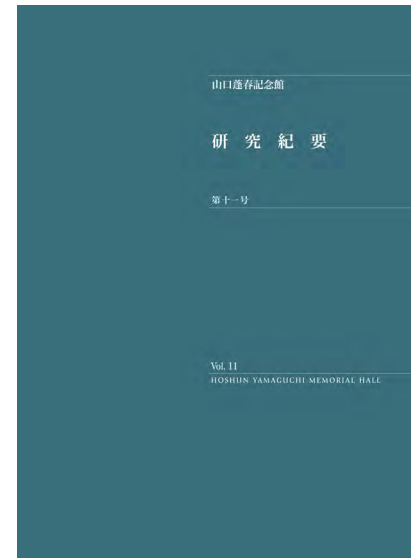
令和4年度寄贈 2点(文鎮)

V. 刊行物の発行(令和3~4年度)

『山口蓬春記念館研究紀要』第11号

発行時期: 令和5年(2023)3月

掲載内容: エッセイ「葉山での蓬春先生」／奥田小由女、蔵書から文庫へ 山口蓬春旧蔵書籍類についての覚書／笠理砂、蓬春研究ノート(11)山口蓬春と写真／岡田修子、新興大和絵派による《小御門神社御絵傳》—作品とその史的意義—／吉田敬、山口蓬春宛書簡(8)／吉田敬、清元美多郎師匠インタビュー—蓬春先生と飯坂の思い出—／岡田修子・吉田敬、山口蓬春記念館の国登録有形文化財(建造物)への登録について／加藤慶輝



山口蓬春記念館 年報 第三号
令和5年7月

編集・発行

山口蓬春記念館

神奈川県三浦郡葉山町一色2320(〒240-0111) 電話046-875-6094

制作

株式会社 erA